

# 上代語構文論 目次

## 第Ⅰ部 歌の構文 …………… 1

第一章 〈豊旗雲尔伊理比沙之…〉——「見し」説は成り立つか…………… 3

第二章 〈何時辺乃方二我恋将息〉——空問の意味か時間の意味か…………… 49

第三章 〈鼻之々々火眉可由見…〉——「鼻唄鼻唄て」は成り立つか…………… 72

第四章 〈辞繁不相問尔…〉——「相問はなくに」は適訓か…………… 88

第五章 〈妹之当繼而毛見武尔…〉——詠嘆性はあるか…………… 95

第六章 〈雪之摧之彼所尔塵家武〉——「し」は助詞か助動詞か…………… 107

第七章 〈見之善雲吾無〉——「てし」は複合助詞か…………… 122

## 第Ⅱ部 歌句の承接関係 …………… 133

第一章 「秋山の黄葉を茂み迷ひぬる…」——順次の承接…………… 135

第二章 「橘を屋前に植ゑ生ほし立ちて居て…」——並列的提示…………… 146

第三章 「引く人は後の心を知る人そ引く」——「そ」の一用法…………… 153

第四章 「潮満たばいかにせむとかか…」——「とか」を含む歌の構成…………… 165

第Ⅲ部 古代歌謡の表現 ..... 173

第一章 〈毗儺利毛毛那比苔〉——「二人百な闘ひと」の可能性 ..... 175

第二章 〈于嗟由豆流多曳麼菟餓務珥〉——「絶えは」の可能性 ..... 187

第三章 〈謎廻利餓於瑠箇儺麼多〉——「綺」の可能性 ..... 200

第Ⅳ部 長歌の表現 ..... 213

第一章 藤原宮の御井の歌 ..... 215

第二章 吉備津の采女の挽歌 ..... 229

第Ⅴ部 已然形の用法 ..... 241

第一章 無助詞の已然形とその用法 ..... 243

第二章 「已然形+か(／かも)」の用法 ..... 265

第三章 「河渚にも雪はふれれし」の構文 ..... 286

第四章 「過ぎかてざるは誰にたゆたへ」の構文 ..... 303

付章 『萬葉集』の語法 ..... 312

第Ⅵ部 語の意味 ..... 331

第一章 「ゆくへ」の意味——空間的か時間的か ..... 333

第二章 「いにしへ」「とこしへ」の成立——時間の獲得 ..... 346

第三章 「奥」「奥か」の意味と歌の構文——空間から時間へ ..... 359

第Ⅶ部 歌の表記 ..... 371

第一章 〈所煞鴨將死〉と〈死々〉——〈死〉字の用法 ..... 373

第二章 〈莫告藻〉と〈名告藻〉——歌意と表記 ..... 384

付章 『萬葉集』の表記 ..... 395

あとがき ..... 411

事項索引 ..... 415

引用歌索引 ..... 418

# 第一章 〈豊旗雲尔伊理比沙之…〉

—「見し」説は成り立つか—

1

「大和三山歌」の第二反歌である、

1 渡津海乃わたつみの 豊旗雲尔とよはたぐもに 伊理比弥之 | 今夜乃月夜こよひのつくよ 清明已曾こそ

〔一・二五〕

という歌の第三句と第四句について、おもに構文面から検討を加える。

右の第三句の〈伊理比弥之〉は『元暦校本』と『類聚古集』の本文だが、ほかの写本には〈伊理比沙之〉（伊理比沙之）〈伊理比佐之〉などともあり、「入り日見し」と「入り日差し」との間で訓が揺れている。また、第五句の〈清明〉をどのように訓ずべきかについて、さわめて多くの論がある。本書の筆者もまた、これらの句の訓と一首の歌意とについて、構文・表記の両面から私見を述べたことがある。<sup>1</sup>第三句は、古い写本に見える〈弥〉字を捨てて「入り日差し」と訓じるしかなく、第五句は「さやけくありこそ」と訓じるのが最も難点が少ないこと、また前半部の「わたつみの豊旗雲に入り日差し」は実景を描写したものでなく、後半部の「今夜の月夜清明こそ」と同様に歌の作者の願望を表明したものだとして解さなければならぬことなどが、私見の要点および帰結